

巻頭言



「もっとも輝ける時の振舞い」

気仙医師会 会長
滝田医院 院長

滝田 有

2020年は人類にとって忘れられない年となった。新型コロナウイルス（SARS-COV-2）は社会を分断し人々から当たり前の日常を奪ってしまった。

最前線に立つ医師も同様である。直接対峙している感染症指定病院の医師は言うに及ばず、診療所でも当初「発熱患者さんは来院を控えてください」と言わざるを得なかった。病で困っている人を救わず何が医者か！と悩んだ先生も多いと思う。

県知事の要請により二次医療圏ごとの発熱外来については昨年5月から協議を続け、7月末に設立、現在7名の先生方が従事している。また国の指針に基づいた「診療・検査医療機関」も10月から説明を繰り返した上、現在8軒の診療所が指定を受けている。

いずれも医師を募るのは「手挙げ方式」とした。「二次感染・院内感染のリスクが高い」、「職員が反対する」、「時間的にも空間的にも動線の分離が出来ない」等々の理由で手挙げを忌避した先生方もあろう。それはやむを得ぬことだと思う。

ただ、手挙げしない先生も自分は見えざる敵と対峙している当事者なのだ、という意識を持っていただきたい。どの先生も休日当番医を担う。発熱患者が来ないとも限らない。その時は管内でのシステムを熟知して対処してほしい。県医師会によれば、クラスターが発生する状況下で、特定の大病院への患者の丸投げや、関係者の受診を拒否する事例があるという。気仙管内でも、システムに沿った発熱患者のフローチャートを例示した保健所にクレームをつける例があったと聞く。指針や資料は全て医師会と協議の上の公表である。

3.11大津波からまもなく10年が経つ。あれだけの災害の後で大っぴらな略奪も暴行もなく、我々は全世界から称賛を浴びた。管内でも当医報第150号の特集を読めば、皆医師として恥ずかしくなく振る舞ったのがわかる。

3.11と同じ国難ではあるが今回は長丁場である。2月から開始されるワクチン接種の有効性、副反応の問題、「指定感染症」の扱いと「医療崩壊」の関係等々予断を許さない。医師は当事者意識を以て見えざる敵を抑え込むまで気は抜くまい。

後世の人から「2021年はもっとも輝ける時*であった」と言われるように振る舞おう。

(2021年1月5日記)

* 1940年7月攻勢盛んなナチスドイツから本土防衛を国民に呼びかける英国首相ウィンストン・チャーチルの演説から引用。

英国がこの後千年続いたならば、後世の人から「それが彼らのもっとも輝ける時 (Finest Hour) だった」と言われるように振る舞おう。